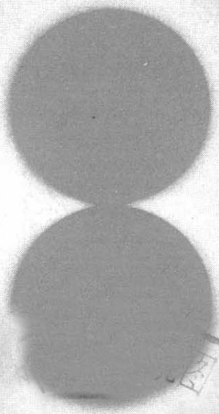
幽霊時代

栗本薫

幽霊時代



栗本薫

講談社

幽霊時代　　定価　八九〇円

第1刷発行　昭和55年11月13日

著　者　栗本　薫
発行者　野間省一
発行所　株式会社　講談社
〒112　東京都文京区音羽2―12―21
電話　東京(03)945―1111(大代表)
振替　東京8―3930
印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　株式会社堅省堂

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。
© KAORU KURIMOTO 1980 Printed in Japan

0093-306944-2253（0）　（文2）

目次

幽霊時代――5
時計台――37
ケンタウロスの子守唄――69
水の中の微笑――143
エンゼル・ゴーホーム――179
「エンゼル・ゴーホーム」だけのためのあとがき――240

装幀　角田純男

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

幽霊時代

幽霊時代

もう何時間ぶっ通しで働いているのかわからなかった。頭はずきずきするし、目はしょぼしょぼを通りこしてシバシバする。げんなりしたような顔つきの看護婦が戸をあけて告げた。

「次の方がお待ちです」

「通してくれ」

医師は云い、そしてぐったりと革張りの椅子にもたれかかった。医者よ、汝自身を癒せ、という、ことわざだか何だかが、唐突に思いうかぶ。できたらそうしたいものだった。週末のゴルフ——大学時代の友人たちと何年ぶりかで会うはずなのだが、それもこの調子ではあやしいものだ。ああ、と医師はつぶやき、思わず洩れたその溜息のうつろさに、自分でびっくりする。こんなことがいったいいつまで続くのだろう。ドアがノックされた。ひかえめな、おずおずとしたノック。

「どうぞ」

入ってきたのは、中年すぎた男だった。身装りは、どちらかといえば、だらしない方だろう。こういうところへはこれまで縁のなかったタイプだとみえて、おどおどとまわりを見まわしている。

「Y……さんですね」

カルテを眺めながら医師は云った。

「どうなさいました」

患者に信頼感を抱かせなければならない。愛想のよい笑顔。物わかりのよい、おちついた、何でもこころえている、という態度。それは端的に《父》のイメージである。自動的に、もうお手のものになってしまった機械のような微笑をうかべてあいてを眺めながら、おれのこの割れるような頭痛と、痛くてたびたび目頭をもまずにはいられない目は、どうすればいいのだろう、と医師は考えた。

「それが……」

客は、口ごもっている。どの患者にも見られる反応だ。自分の云うことが、信じてもらえないのではないか、という恐怖。精神異常者と断定されて、そのまま収容されてしまうのではないか、という怯え。無理もないことだ。人々はたいてい、あらゆる種類の神経症について、ひどい誤解をしかもっていない。

「どうなさいました。おかけになって、話してみて下さい」

もう一度、医師は親しげな口調で誘い水をむける。男は、がっくりと丸椅子に腰をおとした。

と思うと、やにわに、手をあげて、その手に顔をうずめ、子供のように泣きはじめたのである。

これは、予定外の反応だった。しかし、決していないというわけではない。医師はあわてずに、何かやさしいことばを低い声で呟きながら、あいての鎮まるのを待った。

いつでも、それがいちばんよい方法なのだ。まもなく客は泣きやみ、取り乱したことをわび、ハンカチをとりだして鼻をかみ、目をふくと、恥ずかしそうにそわそわしはじめた。恥ずかしがることはありませんよ、と医師は保証してやらなければならなかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ようやく、客は心を決めたようだった。もともと、思いつめ、助言を求めたくてたまらず、さんざん玄関の前を行ったり来たりしたあげくに、おどおどと周囲をうかがって誰もおらぬ隙を見はからってとびこんで来たのだ。それもまた、しかし、誰もがする反応のまったくありきたりなプロセスにすぎない。人は、真の意味でのオリジナリティなぞ、持ち得たことはかつてありはしないのだ、と医師は思った。

水を一口のみ、タバコを吸ってよいかとたずね、両手を膝の上でもみあわせる。その手は大きく、右の中指にインクのしみがつき、左手には銀の結婚指輪をはめている。なおも、もそもそとしたあげくに、ようやく彼は口をひらく——しかし、それも、長いあらずもがなの前置きつきだ。

「信じていただけるかどうかわかりませんが——バカなことを云うとお思いかもしれませんが……私は気が狂ったんでしょうか……お笑いになるでしょうが——」

誰もが、云わずにおれないせりふ。だが、こちらは、もうそれにほほえむほどの気力も残ってはいないのだ。こちらは、それをおききするためにいるのですよ、と力づけるように云う。と、頭の芯がずきんずきんと、あざわらうように痛んだ。

「実は——こんなこと、単なる気の迷いで片づけられるかもしれませんが、実は、このごろ……」

ようやく、そこへたどりついた。男は、ぬすみ見るように、医師の顔を見上げた。

「どうも、その——」

「何でもおっしゃって下さい。何でも云ってみることですよ！」

「どうも——そのう、生きている心地がしないんですが……」

医師は、男のひそかな危惧、あるいは予期に反して、くすりとさえ笑わない。笑いたい気持な

ど、何日も前に失っていた。
（どうも、生きた心地がしないんですが……）
それは、この一週間で数百回――今日一日だけでさえ、すでに何十回となくきかされたことばだったのだ。
「生きている心地がしない、なるほど。ということは？　もっと、詳しくきかせてくれませんか」
機械的に、ペンをとりあげ、カルテに書きこむ。患者は、いくぶん気が楽になったようだ。
「どうって――云ったとおりの意味なんです。何だか――何て云えばいいのか……私は生きているんだ、という、その実感が――どうもしないんですよ。何をしていても、そのう――何だか、紙か……いや、ガラスかな、ガラスをへだてて何かしているみたいな――たとえば、あのう、夢を見ているときがありますね。あのときには、自分は頭のどっかで夢をみているんだと知っていて、それで、これは現実だとは全然思わないでしょ？　――しかし、自分から目をさまそうと思っても、さますわけに行きませんよね……あれと同じ、と云えばいいのか――いや、ちょっとちがうんですが――しかし、あれがいちばん近いんではないかと思うんです」
口をひらきはじめると、ようやくY……氏は、調子づいてきたようだった。
これだって、少しも珍しい反応ではない。怯懦（きょうだ）、不信、たじろぎ、恥じらい――それにつづく急激な打ちとけかた。結局、かれらは、誰かに話したくてたまらず、誰か――妻、友人、上司、父親（生きているとしてだ）あるいは子供にさえ、すでに打ちあけてみ、たいていは信じてもらえぬか、「疲れているのよ」あるいは「気のせいよ」とあっさりと片付けられ、それが不満でたまらず、話したくてたまらぬ気持、助言を得、安心したい気持はいっそうつのる一方で、それでとうとうこ

こへやってくる羽目になるのだから。

そして、医師の、そんなこと――「生きた心地がしない」ことなど実にもうあたりまえで、珍しくも何ともない、という顔つき（また事実、そうだったのだが）に出会う。すると、こんどは、それは、安心感と同時に、正当に扱われなかったような、当然の権利を不当にも無視されたような不満をさそい、そこでかれは何とかことの重大さを理解してもらおうと、必死に話し出すことになる。

「生きた心地がしないんです」

彼はくりかえした。どのていどまで、わかってもらっているのか、心もとない、といった顔つきだ。

「決して、私は、ことばのアヤや、誇張やなんかで、そう云ってるわけじゃないんですよ！　文字どおり、ことばどおりの意味でそうなんです。自分が生きてる、ということに確信がもてなくなって来たんです。ねえ、先生――おわかりになりますか。この不安な気持……自分がほんとうに存在しているかどうかわからない――もしかして自分はどこか別のところで眠っていて夢をみてるだけで、私が現実だと思っている、妻とか、子どもとか、仕事とか上司とか通勤電車とか、これは全部、ただの夢なんじゃないか――目をさましたとたんにフッと全部消えてしまうものなんじゃないか――そんなことをずっと考えているということ――考えずにいられないってことが、どんなに不安なことか、どんなにつらいことか……」

わかりますよ、大丈夫ですよ、おちついて、と医師は大袈裟に力づけてみせた。医師の方が、彼の手をとって、ワッと泣き出したいくらいだった。

「先生、教えて下さい。生きてるって、何です？　先生は、生きているというたしかな実感があるんですか？　もし、それに自信がもてなかったら――自分が生きてるかどうか、どうしてもはっきり云えなかったら、それでもそいつは生きてると云えるんですかね――何か昔のエラい人が云ったんだそうですね……うちの女房が、私がそう云ったら、せせら笑って、云ったんですがね――『我思ウ、故ニ我アリ』って――そのぐらいなら、私だって知ってますよ。しかし、その『我思ウ』が、『おれは本当に生きてるのだろうか』と思ってるのでも――それでも、『故ニ我アリ』なんですかね……私が死人だといってるんじゃないんですよ。ただ――生きるってのがこういうことだって気が、どうしてもしないんです――云ってみれば――云ってみれば、幽霊になったような気分なんですよね……まだ私は、幽霊になったことはないけど、幽霊ってやつは、どうもこんな気持でいるんじゃないか――ふわふわして、どうも心もとなくて、何も実感がない、みたいな――考えていればいるほど、そういう気持になってくるんですね。私はこう生きた心地がしないんでは、死んでるか、夢の中か、どっちかなんじゃないか……しかし、夢だとすると――どうも、女房やガキどもや、それに人様はみんな、実にこう生き生きとしてるんです。こんなバカなこと、考えたこともないって顔してやがる。第一、見たこともない人だの、知らん外国まで、私が夢の中で見られるはずもない。――そうなると、どうも、あとはただひとつ、私が夢をみていてみんなが私の夢なんじゃない。みんなは現実の存在で、私のほうが――何かのまちがいで、私ひとりが、死んじまってるのにそれに誰も気がつかない、幽霊なんじゃないか、という、どうもそんな気がしてならんのですよ――そう見えませんか……教えて下さいよ、先生。私は幽霊なんですかね――それとも、ただの――ただの気狂いなんでしょうか？」

*

「もちろん、たんなる精神異常だろう――それも、あまり珍しくもない妄想型なんじゃないか？」
やわらかな音楽が、会話の邪魔をせぬていどのヴォリュームで、低く流れつづけていた。
照明は暗いが、皿の上の料理や、あいての顔をそこなうほどではない。――それで、楠医師には、あいての冷笑的な表情がよく見えた。
それもまた、精神科医にとっては、ごくあたりまえな反応パターンでしかない、ということに、飯村は、気づかないのだろうか、と思う。心理学というものは、必ずしも人を幸福にしない。人々がどんなに型どおりの精神構造をもち、それに従って思考し反応するか、ということを、日夜立証されつづけていると、だんだん、あいてが、生きた人間というより、データのひとつにすぎなくなってくるのだ。頭は、まだ痛かった。
アスピリンを飲んだのだが、と医師は思い、給仕の注いでくれたワインをやけになって飲みほした。テーブルの上では、オードブルの皿が持ち去られるところだ。
「考えようによっては、ユニークだと云えないこともないかもしれないがね……しかし自分はキリストだ、とかナポレオンだとか神だとか、ありとあらゆる妄想型があることから考えれば、自分は幽霊だ、というのは、そんなに独創的な妄想だとも、云えたもんではないだろう」
医師の、大学病院時代の同僚であった飯村は、いまでは研究室長になり、臨床からははなれてしまっている。しかし、楠が、ひょっとそれを口にしたのは、必ずしも、飯村がもと専門を同じくしていた同業で、助言がほしかったというだけの理由ではなかった。

彼は、不安だったのだ。
（医者よ）
楠はそっとまた呟いてみた。
（汝自身を癒せ）
「何だって？　――だからね」
友人には、彼の呟きは、ききとれなかったらしい。艶のよい、満足した豚のように小綺麗なピンク色の顔をこちらへかたむけて、
「君は、疲れた顔をしてるぜ。やっぱり、このあいだ僕がすすめたときに研究室へ来た方がよかったと思ってるんじゃないのか。いまからだって、遅くないぜ――もっとも、この前よりゃ、それは、条件的には苦しくなるかもしれないがね」
飯村が顔を近づけると、外国もののオーデコロンの深みのある香りがした。いい匂いだ、と楠は思った。匂いを感じる。では、それは現実なのだ。
「有難いと思うよ。しかし――まあ、それはちょっと待ってくれよ。とりあえず、おれは、いまのこのさわぎに気をとられちまってるもんでね」
「幽霊神経症――幽霊症候群かい？」
飯村は、ばかにしたように笑った。もとより、そういうはっきりとした病名がついているわけではなかったが、云われてみると、それはいかにもこの奇妙な病気にぴったりとしていた。
いったい、最初にこの奇妙な訴えをする患者がおれの診療所にあらわれたのはいつだったろう――楠は、運ばれてきたコンソメを機械的に口にはこびながら、ぼんやりと思い出そうとしてい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com